

## 博士論文要旨

### 論文題名：村上春樹・一九八〇年代の短篇作品研究 —『中国行きのスロウ・ボート』、『螢・納屋を焼く・その 他の短編』、「パン屋再襲撃」をめぐって—

立命館大学大学院文学研究科  
人文学専攻博士課程後期課程  
リ ケン  
LI Juan

本論文は、村上春樹が1980年から1985年にかけて執筆した短篇小説13編を研究したものである。

第一章では、海外の要素を内包する「中国行きのスロウ・ボート」、「ニューヨーク炭鉱の悲劇」、「シドニーのグリーン・ストリート」について分析した。異国と対照する手法で日本の世間がより鮮明に描かれている。中国、ニューヨーク、シドニーのように外国人の価値観との対峙・共鳴、外国の歌からの刺激、外国文化からの啓示、外国情勢からの震撼によって書かれた短篇小説である。遠い視点から日本人の生き方・日本社会を眺める手法が見られた。

第二章では、「貧乏な叔母さんの話」を取り上げた。「貧乏な叔母さん」の内実を論究した。単純な少女から貧乏な叔母さんになる過程で様々な不遇を経て、今の存在感が薄い人間像が浮かび上がる。「貧乏な叔母さん」は一人の人物ではなく、一つの記号として扱われている。村上春樹は「貧乏な叔母さん」という一個の中心的なメタファーで小説を築き、その隠喩の手法をもって物語を作り出している。

第三章では、動物が登場した「カンガルー通信」、「土の中の彼女の小さな犬」を対象とした。「カンガルー通信」について、「魅惑的」な手紙の特徴を読み取った。「土の中の彼女の小さな犬」について、その「三つ」の「情景」に生きている登場人物達の形象を考察しつつ、作品の主題を明らかにした。これら動物の行動様式を観察しながら、人間は自己を対象化できた。動物を通して、現代人の生き方・存在状況・個人の感情をより細かく描かれている。

第四章では、「午後の最後の芝生」について、「僕」が「十四年か十五年」前の学生時代の芝刈りのアルバイトを回想する話に注目し、「回想」及び「芝生」の意味を考察した。個人の歴史の悲しみを回想形式によって再現させ、当時見落とされたことに気付き、理解不可能なことを受け入れ、自己の再発見を導いたとも言える。

第五章では、「螢」、「納屋を焼く」について考察した。「螢」について、「僕」の「や

り場のない悲しみ」の内実を明らかにした。「僕」の悲しみは「友人の自殺」、「僕」と彼女との心の距離感などに関連し、若くて未熟のためいろいろなことが理解できない青年像が浮かび上がる。一九六八年の激動時代を背景として、青春時代の裏面、青春時代の感傷的な一面を描き出している。「納屋を焼く」について、事件の要である「彼女」の消失に主眼を置きながら「彼女」という人物形象の特徴を明らかにした。

第六章では、「めくらやなぎと眠る女」について分析・考察を行った。「いとこ」の聴覚障害と「蠅の寄生」との関係性を検討しながら、作者の意図に迫ることを目標とした。

「いとこ」は少年から大人への発達の過程に世の中からの様々なメッセージを感受し、世間に汚される可能性になった。そして、彼が成熟への抵抗はその病んだ「耳」によって現れた。「いとこ」の難聴は病ではなく、成長への反抗だと読み取ることができた。

第七章では、「踊る小人」を取ることができた。「異世界」の登場人物である「僕」、「小人」、「女の子」に焦点を当て、物語の内実を解説することを目的とした。作者は不正常的な「水増し」という社会問題を発見した。想像力によって、「象工場」を通し、現代社会にある利益主義、効率至上主義に対する婉曲的な批判がこれらの作品に仮託されていると言えよう。

第八章では、「三つのドイツ幻想」を取り上げた。「幻想」の内実を明らかにした。冷戦下、ドイツの「濃厚」の社会運動・ナチスの残留・国家統一への展望を非日常の「博物館」、「要塞」、「空中庭園」の形式で示されている。

第九章では、「パン屋再襲撃」を論究した。「空腹感」の正体を探究した。同時に、再襲撃の内実を明らかにすることを目的とした。襲撃という緊迫的、危機的な状況に取り込み、そこから社会との違和感の中に生きざるを得ない現代人の姿を描きながら、人間の独自性の重要性を訴える村上春樹の意思表示として読解することができる。

結章では、一九八〇年代の村上春樹の短篇小説群の位置づけやその芸術的学問的価値を解明した。一九八〇年代、村上春樹の基本的な小説観がすでに形成される。村上春樹は不合理な社会問題への批判、不条理な社会問題への抵抗、さらに不正当な社会問題への暴力的な反抗という問題意識の深まりが見られた。この短篇小説群は村上春樹文学の原点とも言える。一九八〇年代に村上春樹が短篇小説に提出した問題は現在にも深く関わっており、これらの短篇小説は村上春樹文学に欠かせない存在と言える。